



外国にルーツをもつ人が



私たちの住んでいる街でよりよく生きるために



Nagasaki Global Junior Innovators (真未来塾)

高校1年	窄 那明 (リーダー)	…P7-10	全体の構成、課題とアイデア提案
高校1年	櫻井 ももこ	…P4-7	アンケート集計、データ分析、課題提案
中学2年	齋藤 優輝	…P1-3	取材、現状分析、課題とアイデア提案

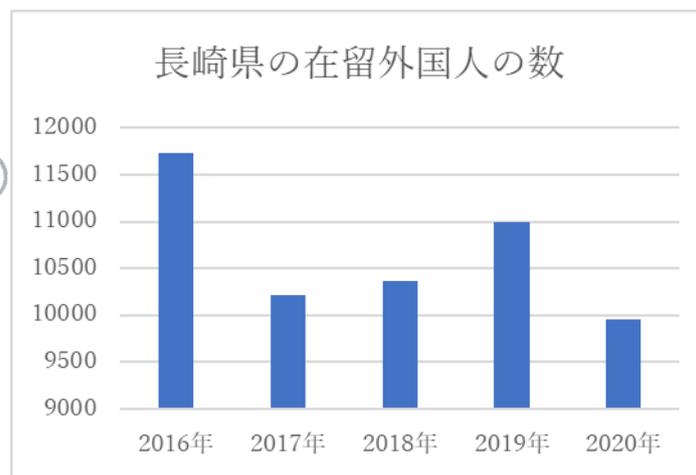
はじめに

僕たちが住んでいる地域には、観光スポットが多いので国内からの観光客だけでなく、外国人観光客が多くやってくる。なので、小学校のころから外国人観光客に道を尋ねられたりするのが日常茶飯事だった。小学校で英語を習っているとはいえ、道案内をすべて英語で言えるはずもなく、通じるよう頑張っただけでジェスチャーなどして道案内していた。僕はそのたびに「言葉が通じないから、自分もジェスチャーなどして頑張っているけど、外国人も言葉が通じないから外国に行くのって大変だろうな。」と思っていた。



そして今回のテーマを聞いて、「え、言葉以外にも困ることってなんだ？」と思い、外国人が困っていることを一生懸命に考えた。まず、自分が外国に行ったと思ってなにも困るかと考えたが、言葉が通じない以外の困った経験がなかったため、わからなかった。そこで、こういうことは、問題を感じている人に聞いたほうがいいと思い、外国人に取材しようと思ったが、観光客の外国人は街中で見かけたり、観光地で会ったりするが、身近に話を聞いたりできる外国人がおらず、留学生や技能実習生を学校や企業が受け入れても、そういう人達とも接点がなかったため、ジェスチャーをしている時以上に困ってしまった。

そもそも、身近に外国人がいないのだから、そんなに長崎県内には外国人がいないのではないかと思います。インターネットでどのくらい外国人がいるのか調べてみると、県内には、思っていたよりたくさん外国人がいた。



だったら、自分たちに接点がないだけで友達にはあるのではないかと思います。周りの友達に「知り合いに外国人がいるか」と聞いてみたら、二つ返事で「ない」といわれた。こうなったら最終手段、取材だ！

取材

そういうわけで、僕たちは長崎県国際課の野崎さんに取材をしに行った。国際課の主な仕事は、国際交流、国際協力、長崎県アジア・国際戦略、平和関連事業などを所管しているようだ。

【長崎県の現状】

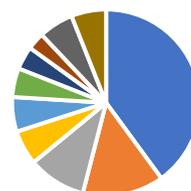
現在、長崎県に在留している外国人の数は約9431人で、留学生は約1332人である。長崎県の総人口が約128万人なので、長崎県にいる外国人はかなり少ないということがわかった。周囲に外国人の知り合いがいないことが、納得できた。ここ2年間は、新型コロナウイルスの影響で、在留外国人の数はあまり増えていないそうである。

在留外国人の国籍の内訳は、1位ベトナム、2位中国、3位フィリピン、4位ネパールになっている。（右図参照）

意外だったのが上位の国がすべてアジアだったことだ。聞いてみると欧米の人は431人しかおらず、ベトナムの方は日本への在留資格が取りやすいので人数が多いそうだ。

在留外国人が住んでいる地域の内訳は1位長崎市、2位佐世保市、3位諫早市である。これらの地域には、大学がいくつかあることに関係しているかもしれない。

外国人労働者の国籍



- | | |
|---------|----------|
| ■ ベトナム | ■ 中国 |
| ■ フィリピン | ■ ネパール |
| ■ カンボジア | ■ インドネシア |
| ■ ミャンマー | ■ 韓国 |
| ■ G7等 | ■ その他 |

【長崎県の在留外国人支援】

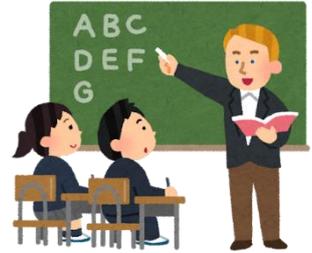
在留外国人への支援について聞いてみた。出島交流会館（長崎市）にある国際交流協会では、わからないことを相談できるようになっており、22ヶ国語で対応しているようだ。英語とベトナム語の通訳は常駐しているが、そのほかの言葉は福岡の業者に頼んで三者通話で通訳するそうである。相談が多いのは雇用、出入国管理、医療などが多く、相談者はベトナム人が多いそうだ。その他にも、弁護士の方々が完全ボランティアで雇用などのことで相談に乗ってくれるらしいのだが、あまり知られていないのか、相談件数は少ないことがわかった。

国際交流協会では、「CIR（国際交流員）と話そう」というイベントを毎週水曜日に開催したり、外国人による弁論大会を実施するなどして、外国人の相談だけでなく、国際交流を推進したり、お互いの国の文化を知る場所づくりをしている。でも、それですべての問題が解決するわけでもなく、宗教の問題や、国ごとの考え方の違いなどはまだあるらしい。



【長崎県の留学生支援】

留学生向けの支援は、留学生に長崎をよく知ってもらうため、県美術館、歴史博物館、梅屋小吉博物館などへの入場料を無料にしたり、教員免許を持っている留学生にはALTの仕事を斡旋したりしているそうだ。



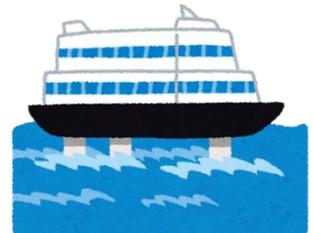
見えてきた問題点

今回の取材で分かったことは、県としても、外国人を助けられるような制度を整えるなど対策をしているが、『その制度のことを外国人に知られていない』ということだ。もしかしたら、『その制度は知っているが、行こうと思っても、遠くて不便、行く勇気が出てこない』ということなども考えられる。そういうところに対処できれば、外国人の人たちがサービスを気軽に利用でき、より楽しく、より良い生活ができると考えた。

問題解決のための提案

僕たちは、長崎に暮らす外国人が支援サービスを知らない、もしくは利用していない理由について話し合い、問題点は大きく次の2つであると考えた。

ひとつは、国際交流協会のようなところが、長崎市にしかないということだ。知っての通り、長崎県は離島が多く、長崎市内まで来るために船を利用しなければならない。そこに行くために、毎回毎回船を使うのは、時間、体力、経済的にとても大変である。なので、簡易的な国際交流協会のようなところを、各自治体に作ればいいのではないか。



もう一つは、外国人への支援制度を知るには、国際交流協会のようなところに行くか、そのホームページを開くしかないということだ。周りにネット環境が整っていない人は、ホームページを開くことができずに、支援を受けられなかったり、災害時どこに行けばいいかわからなかったりすることだって出てくるかもしれない。だから、地域の掲示板のようなところに、ホームページの内容を掲示しておけば、ネット環境がなくとも、外国人の人が手軽に情報を手に入れることができるというわけだ。



しかし、結局のところ、上の二つのアイデアは、僕たちが直接的に外国人に関わることはなく、結局行政に任せていることになる。僕たちが、地域に暮らす外国人のために、直接何かできることはないだろうか。3人で再び話し合うことにした。

アンケート調査

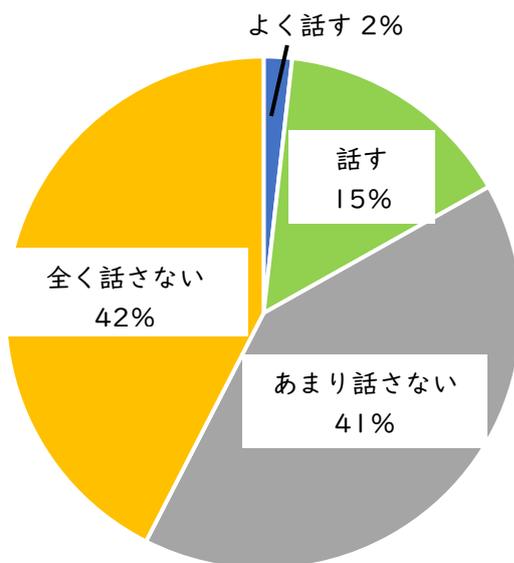
私たちは、この解決策では、実際に私たち自身が地域に暮らす外国人を手助けすることは出来ない、同じ地域の人だから人任せではダメなのでは？と考えました。しかし、私たちが学校、家、塾で生活する中では外国人との出会いがなく、接点がないためどうしようと考えました。

そこで、大学生なら、大学内に外国人留学生がいるため、互いに密に助け合えているのでは？と思い、日本人学生 113 名と留学生 23 名それぞれにアンケートを行いました。

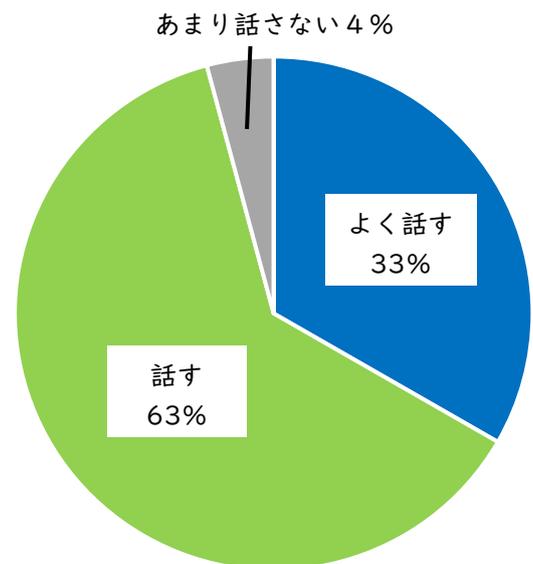
【日本人学生と留学生の関わりについて】

「日常生活において、外国人・外国人留学生と話す機会がありますか」という問いに、日本人学生は「あまり話さない」「全く話さない」という意見が 8 割を超えています（グラフ 1）。一方、外国人留学生は、日常生活において日本人学生と「よく話す」「話す」という意見が 9 割を超えています（グラフ 2）。

【グラフ 1：日本人学生と外国人と話す機会】



【グラフ 2：留学生の日本人学生と話す機会】



日本人学生と留学生でまったく逆の結果となりました。この結果から、留学生が一部の限られた日本人学生としか話せていないということが推測されます。もしも普段話している日本人学生が居ない場面だったら、外国人留学生のみなさんは悩みを十分に相談することができないだけでなく、普段の何気ない会話をすることも難しいのではないのでしょうか。

大学では、日本人学生も留学生も、お互いが近くにいるし、日本語も英語も話せるはずなのに一部の人達しか話していないという結果だということは、周囲に外国人がいないとか、言葉とかの問題ではなく、それ以外の問題があるのではないかと思います。

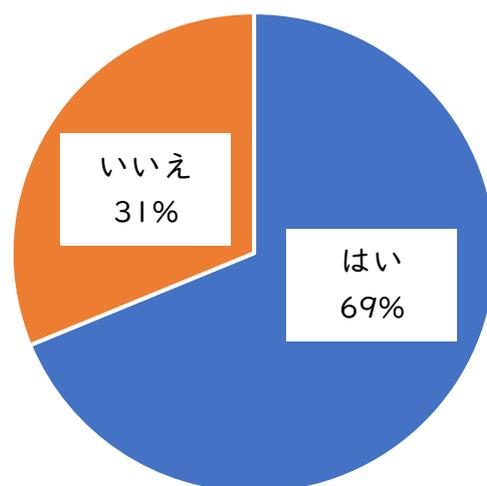
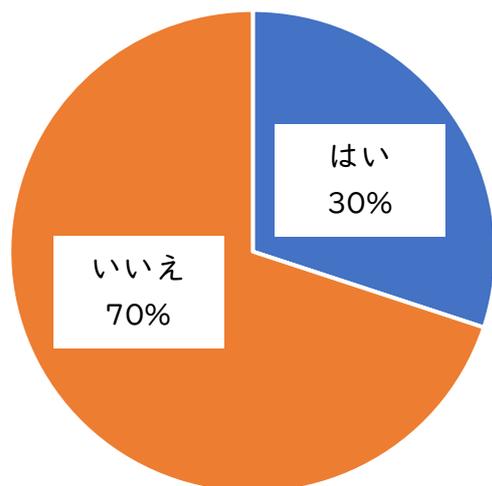
【日本人学生の国際交流、異文化交流に対する意識】

およそ7割の日本人学生が「大学在籍中に海外留学をしたいとは思っていない」と答えている一方（グラフ3）、同じ7割の日本人学生が「国際交流、異文化交流に興味がある」と答えています（グラフ4）。

留学をしたくはないが国際交流に興味がある日本人学生にとって、身近にいる外国人留学生と交流することは、国際交流への一番の近道で、お互いにいい関係が築けるのではないかと思います。なぜ、日本人学生は、外国人留学生と話す機会が少ないのでしょうか。

【グラフ3：大学在籍中に海外留学をしたいか】

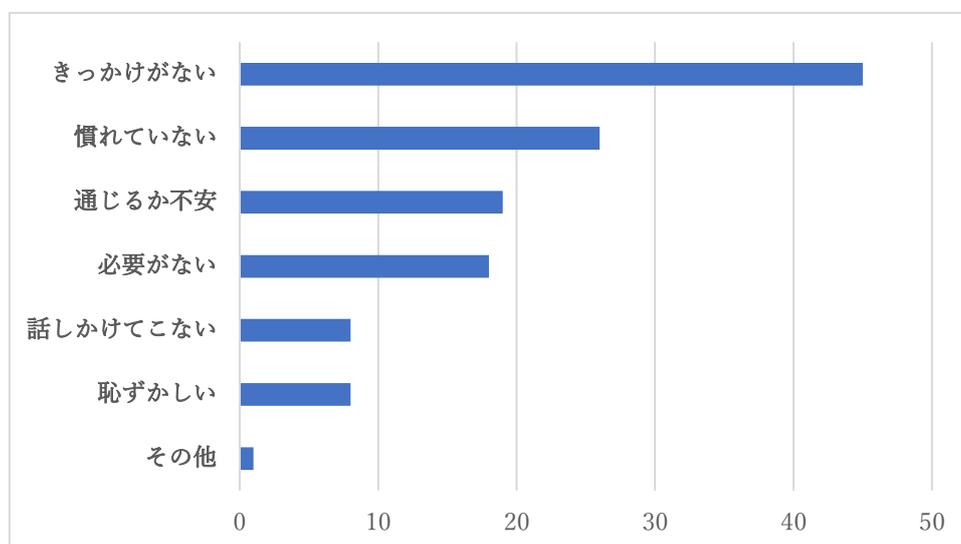
【グラフ4：国際交流、異文化交流に興味があるか】



【日本人学生と外国人留学生との関わりが少ないのはなぜか】

日本人学生に「なぜ外国人・外国人留学生と話す機会がないと思いますか（選択回答）」という質問では、「きっかけがない」「外国人と話すのに慣れていない」という意見が多いとわかります。そのために「通じるか不安」「恥ずかしい」と感じるのだと思います。

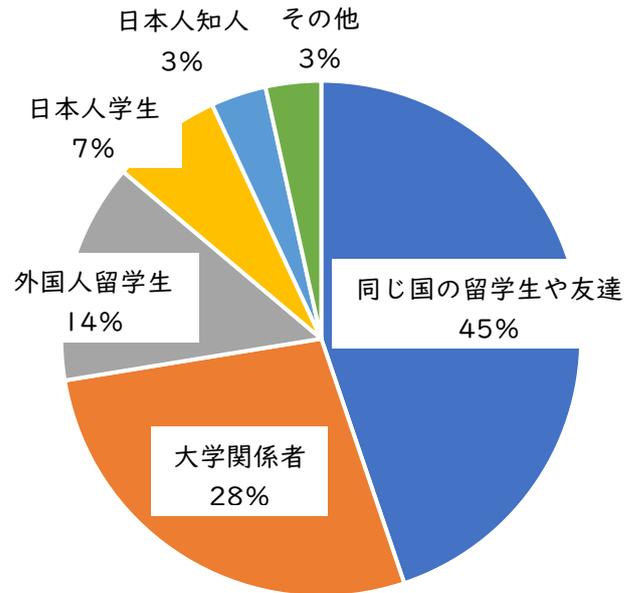
【グラフ5：外国人留学生と話す機会がないのはなぜだと思うか】



【グラフ6：困ったことがあるとき誰に相談するか】

外国人留学生に「困ったことがあるとき誰に相談しますか（選択回答）」という質問では、そのほとんどが、同じ国の留学生や友達、次に大学関係者に相談していて、日本人学生にはほとんど相談していませんでした。

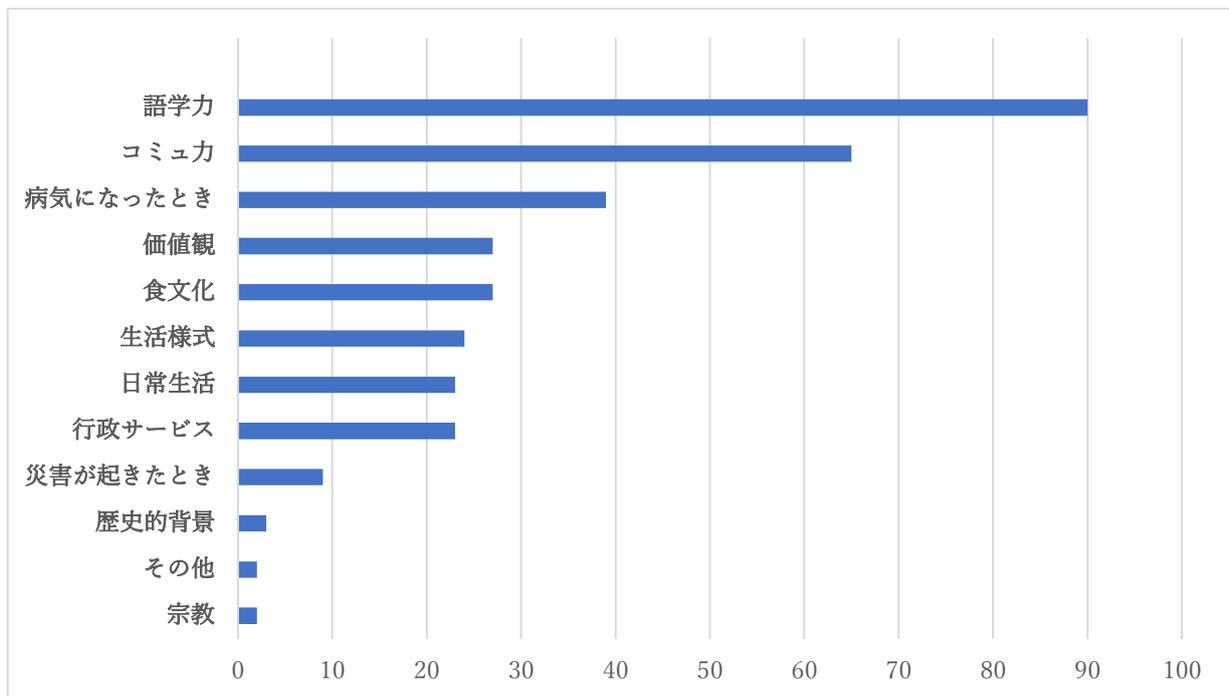
例えば私たちが学校で困ったとき、違う性別や違う学年、違うクラスの人に相談することはあまりなく、友人やクラスメイトなどの普段から関わりがある人に相談するように、お互いに国籍が違い、関わりがないだけでハードルが高く、話しかけにくいのではないかと思いました。



【日本人学生と外国人留学生との関わりが少ないのはなぜか】

日本人学生に「あなたが海外留学をするとして不安に感じることは何ですか（選択回答）」という質問では、「語学力」「コミュニケーション能力」への不安が圧倒的に多いことがわかります。今回アンケートをした日本人学生は留学の経験がなく、まずは「語学力」が一番気になるようです。

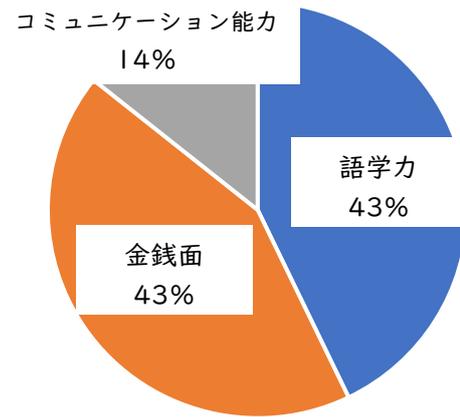
【グラフ7：海外留学をするとき不安に感じることは何か】



【グラフ8：日本での生活において困っていること】

一方、実際に日本に留学している外国人留学生は「日本での生活において困っていること（自由回答）」として、「語学力」と同じくらい「金銭面」の悩みが多くなることがわかります。学費以外にも、日々の生活費や突然病気になったときにかかる医療費などの負担が大きいようです。特にコロナの影響でアルバイトが少ないという意見でした。

実際に留学したことがない日本人学生と、実際に留学している外国人留学生の悩みには違いがあり、日本人学生が留学生の悩みを知らない可能性があります。もし、日本人学生と留学生が話す機会がたくさんあれば、留学生の悩みを解決することは難しいかもしれませんが、悩みを聞いて、留学生の心の負担を軽くすることはできると思います。両学生が交流できるようにし、相手のことをよく知れる場が必要だと思います。



アンケート調査を終えて

私たちは、これらすべてのアンケート結果から日本人学生と外国人留学生は、国籍が違う、話す言語が違うというだけで、お互いに関わるのにハードルを高く感じ、遠慮してしまうせいで、互いのコミュニケーションが生まれず、密に助け合うことが出来ていないのではないかと思います。そこで、普段から互いにコミュニケーションをとることで、このような問題が解決されていくのではないかと思います。

取り組むべき課題

アンケートの結果から見えた課題。それは、日本人学生と留学生の話すきっかけや機会の少なさだ。

僕自身今まで話したことも無い相手に相談ができるはずがないと思う。例えば、相談することがなかったとしても、近くに人はたくさんいるのに、気軽に話せないことはさみしい。毎日の生活で気軽に話せる相手がいるということは、とても楽しいと思うし、充実している。困ったことや楽しいことを共有できることは、より安心で、より楽しく、より良い生活につながるだろう。

相手が相談できるような相手かどうかも重要だ。しかし、現状一部の人の間でしか交流は見られない。その中で、自分の悩みに寄り添ってくれるような相手を見つけることは、とても難しい。同じ境遇にある留学生や、普段から接点を持つ先生に頼るのは当然だと思う。だから、もっと多くの日本人学生と接点を持たた方がいいし、互いについてもっと知っておくべきだと思う。お互いに、お互いの問題を解決できないとしても、悩みを打ち明け、聞いてもらえたり、共感してもらえたりするだけでも、心が楽になることもある。がんばろうと思えることもある。

でも、アンケートの結果から、日本人学生は留学生と話すのに慣れていないと言っているし、留学生も日本人学生と話すのに遠慮がちであることがアンケートでわかっている。そこで、僕たちは、日本人学生と留学生が関わる機会が少ないことが問題だと考え、きっかけとなる場をつくる必要があると考えた。

日本人学生と外国人・留学生に関わる機会が少ない



【日本人学生】

国際交流、異文化交流への興味はあるが、きっかけがない、自信がない、恥ずかしいという理由で、いつまでも外国人・留学生と関わる機会を持たず、コミュニケーションの仕方がわからない状態。

【留学生】

日本人学生と関わる機会を持たず、交友関係が自国の友人に限られ、語学力向上が望めない。困ったことが起きても、すぐに相談できる日本人学生がいなかったため、不安を抱えている状態。

日本人学生と外国人・留学生に関わる機会が増える



【日本人学生・外国人留学生】

語学力が向上することはもちろん、お互いの考え方、文化や価値観を知ることで、お互いへの理解が深まり、あらゆることを共有することで、お互いがいる生活がより楽しく、充実したものへと変化する。何か困ったことが起きても、お互いを知っているため、お互いに協力して対処することができ、大きな安心につながると考えられる。

結論：僕たちの提案

お互いに何か困ったことがあってからでは遅い、日常的に接点を持てるそんなきっかけを作る必要がある。私たちは、日本人学生と留学生が気軽に交流できる環境を作りたいと考えた。

でも、気軽に交流しても長く続かないと意味がない。次の点に注意したいと思う。

- ・ 時間的、経済的な負担がなく、長く続けられて、普段から関わりができるものであること
- ・ 個人対個人、複数対複数でコミュニケーションがとれるものであること
- ・ 場所や時間が限定されず、お互いの話し合いで予定を決められるが、定期的な最低回数は決めること

これらの点に注意して、僕たちは、日本人学生と留学生が気軽に交流できるためのきっかけになるようなアイデアを3つ提案したい。

【① コミュニケーションパートナー（中長期的・個人対個人向け）】

アンケートの中で留学生が「日本語で話す練習をする人がいない。日本人学生は忙しそうで話しにくい」と答えていました。でも、話したい日本人学生もたくさんいることが、アンケートでわかっています。それなら、話したい人たちが会って、話ができるパートナーになればいいと思います。

- ① 大学が希望する日本人学生と留学生を募集する
 - ② 日本人学生と留学生でペアをつくり、マッチングする
 - ③ ペアで、週に1度、30分から1時間程度は会って、会話する
・一緒に買い物や食事に出かけたりしてもOK ・次回の予定を必ず立てること。
- ※ 困ったことがあったら、大学にすぐ相談する



【② ポットラックパーティ（スポット参加が可能・複数対複数向け）】

日本人学生と外国人留学生で、自国の料理を一人一品持ってきて、食事パーティーを開くというもの。周りには同じ日本人学生や留学生がいて緊張も少ないし、おいしかった料理の作り方を聞くなど、会話のきっかけがしやすい。また、その延長で、国ごとにローテーションで料理教室をやってみるのもいいかもしれない。そうして、楽しく相手の国の文化について理解し、関係を築くことができるようになる。



- ① 実行委員が、日時・場所を決めて掲示する。（講義のない時間帯、学内、毎月1回開催）
- ② 自国の料理または得意料理を1品作って、持ってくる。
※作りすぎないこと ※作れない場合は買っていいが、500円まで
※みんなが食べられるように、宗教上食べられないものに配慮すること
- ③ 料理には、「どの国」の食べ物で、「誰が作ったか」がわかるように書いた紙を貼る
※ 日本人学生だけ、留学生だけで集まらないように、バラバラに座る
※ みんなで楽しめるようなゲームを準備しているといい。各国のゲームもやってみたい。

【③ 農園で野菜を育てよう（長期的・スポット参加が可能・複数対複数向け・一般参加可）】

地域には、使わなくなった畑がある。また、地域のお年寄りが畑作業をしたくても、耕すのが大変だったり、収穫が大変だったりして、とても困っているという話を聞いた。それなら、日本人学生と留学生とが一緒に、畑を耕し、野菜の種を植えて、収穫し、料理して食べることで試してみたらどうだろうか。地域の人たちにも参加してもらえれば、もっと盛り上がる。地域の情報もいろいろ聞くことができるし、一緒に作業をするので、会話も増えるし、思い出も増える。おいしい野菜も食べられる。楽しいと思う。

- ① 実行委員が、日時を決めて掲示する。（講義のない時間帯、毎月1回開催）
 - ② 最初は学生のみで開催し、後から地域の方にも参加を促す。
 - ③ 農具の準備や農作業の知識などは、地域の人に相談して協力をお願いする。
 - ④ 収穫の時に参加できない人には、あとで野菜を届けてあげる。
- ※できるだけ大学周辺で、使える畑や農園がないかを探してみる。
※日焼け対策、水分補給は忘れずに。



最後に

災害時、僕たち日本人でさえ恐怖と不安でいっぱいになる中、日本語が分からない外国人の不安は計り知れない。例えば、救援食が宗教上食べられない人もいるかもしれない。しかし、コミュニケーションパートナーやポットラックパーティーを通して留学生と関わりがある人は、相手が食べられないものや必要としている支援について気づくことは出来るのではないか。本当に助けが欲しい緊急時に、外国人と接点のない人が外国人を助けることはとても難しいだろう。

しかし、日頃より外国人に接する機会があることで、災害時外国人の悩みに気づき行動することができる。つまり、外国人との普段からの関わりの中で、当事者意識をもって考えられるようになるのではないか。

また、野崎さんのインタビュー中、次のようなやり取りがあった。

ゆうき君 「僕たち中学生高校生は外国人たちのためにどんなことができますか。」

野崎さん 「近所に外国人の方は住んでいますか。住んでいるのであれば、まずはその人に挨拶するなど、声をかけてみてください。相手の方も絶対にうれしいはずですよ。」

中高生の僕たちに、コミュニケーションパートナーになったり、ポットラックパーティーを開催したりすることは難しい。しかし、野崎さんの言う通り挨拶するだけでも、繰り返していくうちに、そのわずかな会話で面識を持ったことで、災害時に困ったときなどに、その外国人が僕たちに声をかけてくれるかもしれない。僕たちも、声をかけやすい。彼らのためにできることは少ないかもしれないけれど、勇気を出して声をかけて少しでも関わりをもつことが大事だということが分かった。彼らに何か起きるその前に、私たちに何か起きるその前に、お互いに相談しやすい環境を作っていこう。

このような環境を作ることで、大学外にもだんだんと活動の場が広がっていき、外国人だけでなく、地域の高齢者や障害者なども参加しやすくなって行って、誰一人取り残されることのない、尊重される社会への一歩になるのではないだろうか。実は、外国人の人たちが僕たちの街でよりよく生きられることは、僕たち自身がよりよく生きられることに大きくつながっていることに気づいた。

今回、この課題に取り組む中で、僕たち自身、大学生になるのが楽しみになった。コロナで外国へ旅行したり、留学したりするのが難しい場合でも、これなら、どんどん交流できると思う。まずは身近にいる外国人や留学生とお互いに楽しくなれるようなコミュニケーションをとっていきたい。



【出典・参考文献】

長崎労働局「外国人雇用状況」

https://jsite.mhlw.go.jp/nagasaki-roudoukyoku/jirei_toukei/tokei/gaikoku-koyou.html